

三國最強(見た目だけ)が行く恋姫演技

上海・人形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋姫の呂布と良く似た見た目の青年が恋姫世界に飛ばされた

タグは随時追加

r | 18

は原作やり直して勉強してから気が向いたらあげていくつもり

1 話	予告
4	1

目次

予告

(・▽^{やあ}・)ノ

これを読んでくれる人は大丈夫だと思うけど皆は恋姫無双、或いは恋姫夢想や真・恋姫無双、又は恋姫英雄譚と云うゲームを知ってるかい？

恋姫シリーズとも言われるこのゲームは三國志、又は三國志演技に描かれてる人達が女性化して、シリーズ通しての主人公である北郷一刀と恋愛する恋愛シミュレーションゲームなんだけど。

このゲームの呂布奉先と言うキャラをご存知だろうか？

他のゲームなどでも最強のキャラに位置付けられていて、有名で人気なキャラであるのだが、恋姫では三國最強美少女なのだ。

が、俺こと寺尾^{てらお・れん}・鍊(♂20才)は恋姫の呂布に瓜二つらしい。

この話は恋姫の世界で呂布に似ている見た目の俺、寺尾鍊が呂布と共に三國時代を駆け抜ける話。

予告裏

プロデューサー (以下P) 「はい、お疲れさまデース」

作者 (以下上) 「で、どうよ寺尾くん」

寺尾鍊 (以下鍊) 「いや、どうよって言われても、俺って女顔なんすか？」

上 「女顔っていうか、どこからどう見ても女にしか見えねw」

P 「デスね」

錬 「結構鍛えてて格好いいって母親からちよくちよく言われるんですけど」

上 「何て言うか、宝塚の男役的な格好良さ？」

P 「あー確かに、女性から見た女性の格好良さデスよね」

錬 「だからPさんずっとキヤーキヤー言ってたのか」

P 「そうそう、そのまま行けば女の人にモテるよ」

錬 「逆に男だとバレたら怖そうですね」

上 「大丈夫じゃない？予告で、男だと一応明言してあるし」

錬 「そんなもんかねえ」

P 「そーですよー、それに戦いに強くて軍略にも明るく、更に優しい何て普通にツカキャラの様なものじゃないですか」

錬 「強いのは鍛練を長年続けているから、軍略はゲームお宅だから、優しさなんて人間誰でも持つてるだろ？」

P・上 「ダメだこりや」
σ^ア(?^{チャ}▽?^ス?^ス;)」

設定
名前
寺尾錬（てらおれん）
後に姓は呂尾（りよび）字は寺皇（じこう）真名を錬（れん）とする

性別

男

年齢

20才

趣味

コスプレ（見るのも作るのも着るのも）

ゲーム

マンガ

アニメ

ライトノベル

使用武器

方天偽戟（ほうてんぎげき）方天戟

呂布の使っている方天画戟の色違い、持ち手部分が反転色、他にも石突きの部分のセキトの飾りの代わりに一メートルちよつとの長さのりボン（紫）を二本垂らしている。

見た目

少し身長が高く胸が無くなった呂布

アホ毛もある

呂布と比べて凄くタレ目

同じ様なデザインの服を着るが、基本錬は呂布と同じ柄のボンタンのようなズボンを履いている

性格

基本的に温厚

敵に容赦がない

キレると怖い

味方にすごく甘い

以外とノリも悪くない

伊勢神宮の有る県出身のくせして軍神八坂や鹿島の方が好き女に見られることを気にしている

出身

日本・三重県

1話

それは友人の一言から始まった。

「寺尾ってさあ、恋姫無双の吕布そつくりじゃん。だからコスプレしようぜ！」

「意味がわからん、却下だ」

「そんなこと言わずにさあ！」（バサッ！）↑なぜか友人のクローゼットから吕布のコスプレ衣装

「やけにクローゼットを気にしていると思えば、いつの間にも買ってんだよ」

「買ってない作った！」

「やっぱりお前バカだろ」

「イエス！」

「イエスじゃねーだろーが」

そんな会話を皮切りに押し問答になり押し負ける。

「じゃあねえ、今回だけだかつな」

「ウイー！勝った！第三部！完！」

「何にだよ」

そんな会話をしながら渋々着ることになった。

数☆分★後

「やっぱり俺の見立てに間違いはなかったな」

「うるせえ、律儀に男用に作り替えまですてるとかお前本当にバカだよ」

「これを見れば本望！」

「ハイハイ、じゃあ着替えるから出てけよー」

「ウイツス」パタン

「つたく、しち面倒クセエことしやがって。

つか、これ何よ。『恋姫で学ぶ後漢・三國時代』？これが元ネタかよ」

彼が着替えの手を止めパラパラめくっていると彼の背後で強い光が発生する。

「ンだこれ！マブシッ！」

その一言を最後に彼は氣を失う。
そこに友人が入ってくる。

「やっと彼も恋姫世界（向こう）に行ったわね。でも本当にこれで良かったのかしら。ま、責任は上がとるでしょ。

でも、死なないでね錬君」

数分後彼は目覚めた。

但し、荒野のど真ん中で。

「あのヤロー、やりやがったな」

そこに空気を読まない（読めない）三人組が現れる。

「アニキ！ヤケに身形のいい女が立ち尽くしてますぜ！」

「お？マジじゃねえかこりや一晚、いや、もっとツき合ってもらおうぜ！」

「そ、それはいい考えなんだな」

（女？呑気だなあ）

「ネエちゃん、俺等と一杯どうよ」

そう言い、アニキと呼ばれた男は立ち尽くす彼の肩に手を置く。

「まさかとは思うが、ネエちゃんってのは俺のことじゃあネエよなあ

「？」

と、彼は意識して少し低い声で問う。

「あ？おめえ男か？」

「だったら？」

「なら用はねえ！」

「ヤっちまいましたよ！アニキ！」

「テメエ等がくたばれ！」

数☆分★後

「二「マジでスママセンしたあ！」」

「これに懲りたら盗賊なんて面倒くせえ事をから足洗えよ」

「二「わかりましたあ！」」

「ならよし」

そのまま三人組と別れ、聞いた集落がある方へ歩く。

そして、集落まで後30分ほどの距離だと鍊と同じくらいの身長の子と腰ほどまでの身長の子の二人組と出会う。

「恋殿がお二人!!」

「誰？」

「あんたこそ誰だ？」

「呂布奉先」

「そうか、俺は寺尾鍊」

「そう、話がある着いてきて」

「ウース」

「チヨ!?恋殿?さつき集落から出てきたばかりですよ！」

「私の兄弟かもしれないから話を聞く」

「わ、わかりましたあ」

三人は集落に向かって歩き出す、チビツ子が鍊を睨み付けたまま。